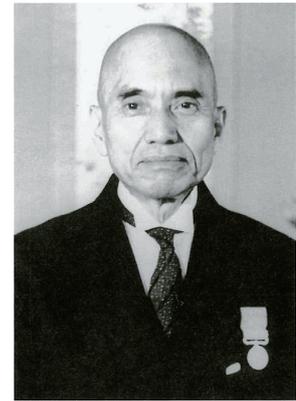




先人の思いを胸に 松やに一筋の道を歩む

あらかわ しょうたろう
荒川 正太郎 (1885~1959年)



■荒川化学工業 株式会社

本社所在地：大阪市中央区平野町 1-3-7 従業員数：1,477名(連結) 資本金：33億43百万円
創業：1876(明治9年) 設立：1931(昭和6)年1月
事業内容：製紙用薬品、印刷インキ用樹脂、粘着・接着剤用樹脂、電子材料の中間素材などの製造・販売

和薬問屋「玉屋」から誕生した荒川商店

1885年9月27日、大阪の伏見町に父・彦兵衛(二代目荒川政七)と母・ハツの長男として正太郎は生まれた。後の荒川化学工業株式会社 初代社長である正太郎を語るには、まず正太郎が生まれた荒川家について述べなければいけない。

まだ商人は姓を用いず名前に屋号を冠することが当たり前の時代、初代政七は1856(安政3)年に大阪伏見町において「玉屋」の屋号で和薬問屋を開始した。店では国産の川芎や桔梗根、黄蓮、松やなどの生薬(動植物の部分・細胞内容物・分泌物・抽出物あるいは鉱物で、そのまま薬品として、あるいは製薬の原料として用いられた)を取り扱っていた。



荒川政七商店の看板

明治に入り、商人も姓を名乗るようになると、政七は玉屋を廃して新たに「荒川政七商店」に店名を改めた。後に、この店名変更の年の1876(明治9)年が同社創業の年に制定された。1879(明治12)年には店員であった彦兵衛を娘・ハツの婿養子に迎え、その翌年には、家業および荒川政七の名を彦兵衛へと譲り、自らは退隠し名前は政六と改名した。ハツと二代目政七の夫妻は長女・ハマ、長男・正太郎、次男・菊治郎をも

うけ、政六から継いだ家業も好調で、何不自由なく暮らしていた。

しかし、元来体の強くなかった政七は、1894(明治27)年に44歳という若さでこの世を去ってしまった。当時31歳のハツに残されたのは、店主のいなくなった荒川商店と、3人の幼い我が子であった。



荒川ハツ

正太郎の母・ハツの店主時代

悲嘆に暮れていたのも束の間、夫の死をうけて荒川商店店主の座についたハツの双肩には、これから女手一つで背負っていかねばならない家業の重責がのしかかった。

隠居生活を送っていた政六は店へと戻り、ハツに商いの指導をするとともに、再び家業に従事した。こうした父のサポートもあり、日清戦争が終わって中国との貿易が再開されると、ハツは難しいとされていた黄蓮の中国輸出に着手した。天産物である黄蓮は、天候による作柄の良否や保存の難しさなどに加えて、中国人による大量の買い付けで価格の変動が激しく、多分にリスクをはらんだ取扱品であった。しかしハツは中国人相手にこの商取引に積極的に取り組み、やがて荒川商店は黄蓮取扱業者としてトップクラスの店となった。その後も、取扱いに不便であった国産松やをそのまま納入するのではなく、取扱いやすいように加工してから納入することで、大阪陸軍砲兵工廠からの注文が増加、日露戦争が開戦する頃には納入業者トップの座を獲得するなど、当時では珍しい女性経営者の先駆けであった。

すべてが順調であるかと思われた矢先、ハツの身に突然の不運が降りかかる。盛業の最中であった1906(明治39)年、かねてから家業不振に陥っていた近隣商店の苦境を見かねたハツが、手形に裏書きして連帯保証したところ、結局その店は倒産し、ハツの裏書手形は荒川商店の債務となってしまった。その店はハツの父・初代政七がかつて丁稚奉公で世話になった店であり、ハツにとってはまさに青天の霹靂であった。降って湧いたような苦境に際しても、ハツは迅速かつ誠実に対処した。まず、荒川商店の営業を中止し、全財産を投じて自店関係の清算を済ませ、さらに余剰金の全額を手形裏書の連帯債務の返済に充当した。突如無一文になったばかりでなく、支払い不能の債務を負う身となってしまったハツだが、その目はしっかり将来を見据えていた。ハツにとっては、息子の正太郎と菊治郎に荒川商店を継承させることが唯一の願いであり、そのためには荒川商店をすぐにも再開させる必要があった。

母・ハツの悲願 家業継承に懸ける思い

ハツの家業継承に懸ける思いもさることながら、彼女の商人としての誠実さや勤勉さに心動かされた仲間からの応援があり、荒川商店は幸いにも1か月後に営業再開を果たした。

正太郎は兵役に出ているため、菊治郎を奉公先から呼び戻し、あとは店員一人とハツの3人で再スタートを切った。少しでも売り上げを増やすため、ハツは道修町の店々の開店に合わせて注文をもらいに行く「朝回り」に奔走した。通常、20歳前後の若い店員が朝回りに行くが、ハツはそれに負けじと青年たちに交って朝の道修町を駆け回った。まだ性別によって仕事や役割が明確に分けられているような時代、朝回りをした女性はハツが最初で最後であった。

こうした努力の甲斐あり、営業再開の1年後には荒川商店を再び軌道に乗せることができた上、1911(明治44)年には連帯保証による債務をすべて返済することができた。1908(明治41)年、兵役を終えて戻ってきた正太郎はすぐに手腕を発揮し、荒川商店は見る見る活況となった。1911(明治44)年、正太郎がハツの後を継いで荒川商店店主の座に就いた。ハツの悲願であった息子への家業継承がやっと果たされた瞬間であった。

松やに事業への本格的進出を決意

正太郎は1905(明治38)年に大阪薬学校(大阪大学薬学部の前身)を卒業すると、国家試験にも合格、薬剤師の免許を取得していた。当時はまだ、正太郎のような薬剤師の店主は珍しい存在だった。そんな正太郎を店主に、菊治郎と店員4人の総勢6人という店員構成で、母・ハツは店のことから退き、その後は一切口出しをしなかった。

日露戦争後、富国強兵・殖産興業の国策のもとに、日本の産業全般は急速に発展拡大への途を辿るが、そうした産業振興の時代を背景に、ロジン(松やにを精製して得られる天然樹脂)やテレピン油などの需要も次第に大きく成長する傾向にあった。この状況を考慮し、正太郎は自ら松やに事業への本格的進出を決意。国産松やにのみならず輸入松やに、特に中国産松やにをも視野に入れた、ロジン、テレピン油などの製造事業に着手するため、1914(大正3)年、大阪府東成郡新喜多村(現・大阪市城東区鳴野)に鳴野工場を開設した。



開設当時の鳴野工場

正太郎、松やにの将来性を確信

1915(大正4)年、正太郎は以前から研究していた、松やにからテレピン油を製造する試験に成功し、それを「東洋松印テレピン油」の商品名で発売した。これが日本で最初のガムテレピン油(松やにの水蒸気蒸留で得られるテレピン油)であった。当時は石油工業があまり進んでいない時代で、テレピン油は、塗料、靴クリーム、染色などの溶剤として用いられ、特にガムテレピン油はアメリカからの輸入品しかなかったため、同商品の出現は市場の注目を集め好評を博した。

1927(昭和2)年、正太郎は当時世界最大のロジン生産国であったアメリカの松やに産業の実情を視察するため、片道20余日の船旅で単身渡米を決行した。正太郎はこの視察旅行で松やに事業に対する自信と情熱をよりいっそう確かなものにし、荒川商店の将来が松やにと共にあることを強く確信した。



松やに採取の様子

その後、正太郎は昭和初頭に登場したラッカー塗料が、その使用原料のすべてを輸入品に依存している現状に着目し、1928(昭和3)年に塗料原料であるエステルガムの国産化を開始した。このエステルガムの国産化は業界から注目され、その年の暮れまでには、国内需要の全量を荒川商店が生産供給するようになった。また、同じ年には、アメリカ視察で習得したノウハウを基礎に、輸入高級ロジンに匹敵する「菊松印ロジン」を開発、大量生産することに成功した。

1931(昭和6)年、荒川商店は個人経営から合資会社へと改組し、初代社長には正太郎が、副社長には菊治郎が就いた。1937(昭和12)年には、数年前から研究を始めていた油溶性石炭酸樹脂に関する知見を基礎に、ロジン変性フェノール樹脂の開発に成功、「タマノル」の商品名で発売が始まった。主な用途としては、印刷用インキのワニス用や塗料用、その他電気絶縁ワニスなどに使用された。なお、この製品はこのあと技術改良を重ねながら、同系列の新製品を継続的に開発していった。



大正8年頃の荒川商店 従業員



店頭に座る正太郎

戦争の抑圧と混乱の中で

1 941(昭和16)年、日本は米英両国への宣戦布告とともに、太平洋戦争へと突入した。“聖戦完遂”の国家目標のもと、それまでの戦時体制はより強権的な総力戦体制に姿を変え、国民生活も産業活動も戦争の渦中に巻き込まれた。

翌年、重要産業指定規則改正法の公布により、国産松やにを中心とした製品はすべて農林省、商工省の斡旋指導で設立された日本特殊林産物統制(株)の制約下に置かれることとなった。この会社は、各地にある松やに工場のロジン、テレピン油を買い集め、出荷先や数量などを統制した。エステルガムやタマノルなどを製造する場合には、まず統制会社に品名、数量、販売先などを記入した払下要望書を提出し、許可を得て、ようやく工場に保管中のロジンを使用できるという状況であった。

そのような時代背景の中、1943(昭和18)年に「荒川林産化学合資会社」へと社名を変更した。商業活動が許されない戦時下、荒川商店という社名では、業界の実情に明るくない軍部や中央官僚には、家業的で小規模かつ商業のイメージを与えてしまうため、各方面にメーカーであることを強調する、生き残りをかけた社名変更であった。

戦争により辛酸を嘗めるような思いで過ごした4年間であったが、1945(昭和20)年、戦争は日本の敗戦という形で終わりを迎えた。空襲により本社の一部が焼失し、鳴野工場は全焼した。また、終戦直後は食糧輸入が優先されたため、ロジンの輸入は不可能であった。幸い、今福工場が戦火を免れたため、戦時中も操業を続けることができたが、国全体が混乱と無秩序に支配されていた戦後状況のもとでは、ただちに本格的な生産再開というわけにはいかなかった。

日本が徐々に戦後復興していく中、1949(昭和24)年、今福工場では生松やに精製技術の向上に取り組み、洗浄・濾過装置を改良して「白菊印ロジン」を発売した。

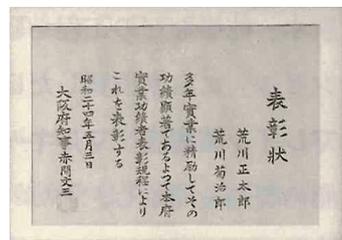


松やにの仕込み作業

すると発売直後から、最高品質かつ最高級品として業界でも特別扱いを受けるなど注目を集め、世間に“松やにの荒川”を強く印象づける製品となった。

松やに産業のパイオニアとして

白 菊印ロジンの発売と同年の1949(昭和24)年、それまでの功績が称えられ、正太郎は弟の菊治郎とともに大阪府より実業功労者として表彰される栄誉に輝いた。これまで発売したロジンの商品名に菊の字を入れていたのは、正太郎の、弟・菊治郎への日頃の感謝の気持ちであった。ゆえに、兄弟連名での表彰は、正太郎にとって大いに喜ばしいことであっただろう。



正太郎・菊治郎 連名表彰状

精力的に新商品開発に取り組む中、1954(昭和29)年には、強化ロジンサイズ剤「サイズパイン」を開発。戦前、多くの製紙業者はアメリカからロジンを購入し、インクのにじみ止めであるサイズ剤へと自社で加工して使用していた。しかし、戦争が始まるとロジンが欠乏して手に入らなくなったため、業者はこぞって国産ロジンを使用するようになった。それを契機に、荒川の品質の高さが製紙業界に広く認識されるようになり、サイズ剤へと加工する手間のないサイズパインは製紙業界に新風を吹き込んだ。



サイズパイン海上輸送タンク船

1956(昭和31)年、合資会社となって満25周年の節目に、株式会社へと組織変更し、社名も「荒川林産化学工業株式会社」へと変更した。正太郎が家業を継いでからおよそ半世紀、菊治郎とともに家業繁栄の舵取りに尽力した集大成となる組織変更であった。

喜びを胸に新たなスタートを切った矢先の1959(昭和34)年、正太郎は突然脳血栓症に倒れ、しばしの療養の後に静かにその生涯に幕を閉じた。生涯を松やにに捧げ、時代の荒波に揉まれながらも、代々受け継いだ家業の灯を絶やすことなく、確信を掴んだ松やに事業からその手を離すことはなかった。

今年で創業143年を数える同社の歴史は、ロジンへのこだわりを背景に、先人たちのたゆまぬ努力と、さらなる高みを目指すチャレンジ精神で築き上げられてきた。そしてこれからも、ロジンをはじめとする地球に優しい素材を通して社会に貢献する、“スペシャリティー・ケミカル・パートナー”として、また新たな歴史を刻み歩んでいく。